青山国際政経論集 108 号、2022 年 5 月

資　料

朝鮮芸能に携わる在日コリアンのライフヒストリー【言語・コミュニケーション編】

猿　橋　順　子＊

本稿は、「朝鮮芸能に携わる在日コリアンのライフヒストリー【技芸の研鑽・活動編】」に続く【言語・コミュニケーション編】である。移民の社会統合や多文化共生施策を論じる上で、言語継承や言語教育政策の諸相を看過することはできない。そのため、移民や越境者の言語面の道程（言語バイオグラフィー）、それに付随する言葉に対する思いや、継承言語とアイデンティティの関連に着目した書籍は、学術書から一般向けの書籍まで広く刊行されている。そして日本の文脈で、このテーマについて論じるとき、在日コリアンの世代間言語継承および朝鮮学校をはじめとする民族学校での言語習得・言語生活の系譜を辿ることは極めて重要である。本稿はこうした背景に与することを視野に入れて起草した。

本稿に登場する、踊り・歌・楽器をそれぞれの専門とする 3 人の語り手たちは、1970 年代後半に関西（京都）、四国（愛媛）、首都圏（東京）で育ち、それぞれの地で朝鮮学校に学び、朝鮮の民族芸能のアーティストとしての道を志し、同じ時期に平壌での通信教育（短期留学制度）で技芸を磨き、金剛山歌劇団（東京都小平市）で団員として活躍し、現在は後進の指導にもあたっている人びとである。また、朝鮮学校に通う学齢期の子どもをもつ子育て世代でも

＊青山学院大学国際政治経済学部教授

あり、次世代への言語文化継承についても各人の思いを語っていただいた。

彼／彼女らは在日コリアン三世・四世で、幼少期の母語は概ね日本語である。家庭内では主に日本語を使用していたが、朝鮮幼稚園あるいは朝鮮初級学校（小学校）への入学を機に、「正式な」朝鮮語教育を受ける。音楽や舞踊に出会い、その道を志すようになるのも、朝鮮学校での部活動や指導者、仲間たちとの出会いに影響を受けてのことである。芸能の道を進むにつれ活動範囲も広がる。東アジアの国際関係に翻弄される面もあるとはいえ、朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国、日本各地を演者・奏者として行き来するなかで、朝鮮語・韓国語・日本語のさまざまなスタイルと混淆に触れていく。朝鮮学校の朝鮮語、平壌の先生や演者達の朝鮮語、金剛山歌劇団内のいわゆる「在日語」、家庭や地域コミュニティの朝鮮語語彙交じりの日本語、公演や指導で訪れる韓国（主に都市部）の韓国語、韓国各地に暮らす親族の韓国語などである。

【言語・コミュニケーション編】には、これら言語とコミュニケーションに関連する語りをまとめた。そのため、移民の言語継承や言語教育政策に関心をもつ読者には本編がより参考になるだろう。しかし、語り手の生きざまや経験から生じる言語・コミュニケーションのありようをより深く理解する上では【技芸の研鑽・活動編】もあわせて参照されたい。なお、冒頭のプロフィール文は両編とも同一の文章を掲載している。また、インタビューはコロナ禍の2021年8月に実施した。記録には、コロナ禍によって制約を迫られるコミュニケーションや、新しいつながり方の可能性についての語りも含んでいる。

インタビューは筆者が取り組む「多言語社会日本の言語コミュニケーション管理に関するインタビュー調査」の一部に位置づけ、口頭および書面で研究の趣旨を説明した上で、「調査参加への同意書」を二通作成し交わした。また、日本言語政策学会特定課題研究の助成を受け、インタビューは猿橋順子（青山学院大学・研究代表者）、飯野公一（早稲田大学）、境一三（慶應義塾大学）、高民定（千葉大学）の4名で行った。新型コロナウイルス感染症予防の観点からオンライン会議アプリ Zoom を用いて実施した。なお、調査参加者の名前については参加者と協議の上、同意書を交わした上で実名掲載としている。

宋栄淑（ソンヨンスク）さん

1975年、京都府に生まれ育つ。在日コリアン三世。父方の祖父母は済州島の出身。幼稚園から高校まで朝鮮学校で学ぶ。1994年、金剛山歌劇団に入団。朝鮮舞踊のソリストとして23年間活躍。団員の舞踊家と結婚。2017年退団。現在は朝鮮舞踊の舞踊家および指導者。自らの怪我を克服する過程で開発したReviveエクササイズのトレーナーとしても広く活動している。二児の母である。

（インタビュー実施日：2021年8月9日）

――小さい頃、ご家庭の中に朝鮮語はありましたか。

宋栄淑：はい。単語は朝鮮語が出てきます。「チャルモッケッスムニダ（いただきます）」や、「チャルモゴッスムニダ（ごちそうさま）」は今でもそうですし、「ぞうきん」は「ヘンジュ」とか、そういうのは朝鮮語ですね。ですが会話のほとんどは日本語でした。ハルモニ（おばあさん）、ハラボジ（おじいさん）と一緒に住んでいまして、ハラボジとハルモニは半分ウリマル（私たちの言葉＝朝鮮語）で生活されていました。ハラボジは私が6歳の時に亡くなられて、それ以降はハルモニも日本語でお話するようになりました。

――朝鮮学校に入るときにはすっと入れましたか。先生の話している言葉が分からないとか、そういうことはありませんでしたか。

宋栄淑：私は幼稚園の年長から朝鮮学校に入りました。言葉が分からなくてどうしようっていう記憶はまったくないです。本当に自然に。たぶんそういうふうに先生が日本語と朝鮮語を交えながら上手に教えてくださったのかな。本当にストレスなく。今、私の息子が1年生なんです。日本の保育園に通って、1年生から朝鮮学校に入ったのですが、ストレスは感じていないです。先生方が上手に、ストレスにならないように指導してくださっ

ています。ピアノの音に合わせて走り回って言葉を体で覚えている感じです。私の時代にはなかったことが、今、私の息子を見て「そうやって学んでいるの？すごく楽しそう、いいな」と思っています。

――お子さんが小学校に入ることで、家庭の中で朝鮮語が増えたということもありますか。

宋栄淑：増えましたね。まだ学校が4月に始まって5、6、7と3カ月なんですけれども、ふとしたときに自然に出るんですね。「ごめんね」が「ミアネ」になっていたりとか。今まで言ったことのない言葉が、自然に出てくるのがうれしいですね。

――いいですね。お子さんを見て栄淑さん自身が朝鮮学校に通った日々を思い出すということもありますか。

宋栄淑：私の頃は、以前、日本の学校の子どもたちとやっぱりけんかとかもあったと聞いていました。私たちは紺色のチョゴリの制服を着て学校に行ってたんですけれど、「かわいいわね」とか、「すてき、着てみたいわ」って言われました。銀閣寺の横に朝鮮学校があるんですけど、学校に行くときは哲学の道を通って観光客に混じって行く感じです。外国の観光客の方からも「この衣装は学校の制服なの？」と声をかけられました。英語で話しかけられたり、道を聞かれたりしました。それで高校生の時は、英語に興味をもってスチュワーデスになりたいという夢をもって、英会話学校に通ったこともありました。世界にはいろんな人がいるということが自然なことだったと思います。

――息子さんを朝鮮学校に入れられたというのは、ご自身の経験をつないでほしいという気持ちもあったんですか。

宋栄淑：自分で選んでほしい。朝鮮学校の土曜保育のような保育園がありまして、「嫌だったら行かなくていいよ」と言っていました。そうしたら「朝鮮学校がいい」と言うので、今、行っています。親としては言葉やルーツを学んでほしいという思いはあります。

――栄淑さんのお話に戻って、舞踊を習う、稽古する上では言葉はネックにな

ったりしますか。それとも言葉は関係ないものでしょうか。

宋栄淑：最初に舞踊を習うために平壌に行った高校生のときは、3分の2聞き取れなかったと思います。朝鮮学校で朝鮮語を学んだとしても、本場とはニュアンスが違うので、先生が言っていることは「ん？」「ん？」っていう感じでしたね。それが毎年行くようになって徐々に聞き取れるようになっていきました。最初は半分ぐらい何を言っているのか分からない。でも先輩たちは分かっているんですよ。毎年行ってコミュニケーションにも、雰囲気にも慣れていますので。年を経るとどんどん分かるようになってきます。韓国語と朝鮮語も違うんですよね。ニュアンスも違いますし、イントネーション、単語や表現も違います。私のおじいちゃんは済州島出身ですから、家でしゃべっていた言葉とは全然違います。親戚から電話が来たときも、私はほとんど分からなかったですね。ですので、平壌に行ったときも最初は分からなかったですけれど、踊りは体で表現するので、歌を専門とする方々が発音で引っかかるというのとは少し違うかもしれません。そう考えるとまだ楽だったのかもしれません。

――済州島の言葉と朝鮮学校の言葉と、平壌の言葉と３種類に触れるんですね。

宋栄淑：そうですね。とくに済州島の言葉は私の中で別ものに聞こえていました。2年前、済州四・三事件の慰霊公演で私が『4.3の風』という作品の主人公を踊る機会をいただいて行ったんです。市役所の前の舞台で踊ったんですが、済州島は学生時代にお墓参りで1回行ったことがあって、それ以来だったので本当に20年ぶりぐらいに行きました。昔よりは少し聞き取れるようになっていました。まだ平壌の朝鮮語のほうが分かります。

――たとえば踊りをするときにいろんな指示を出したり、かけ声をかけたりすることがあると思いますが、それについてはどうですか。

宋栄淑：あります。やっぱり踊りがうまい人は言葉もうまいと思います。本場っぽくなるというか。これは私の感性かもしれませんけれど、朝鮮舞踊も韓国舞踊もそうですが、チャンダン（長短）という朝鮮半島の音楽のリズムパターンがあります。チャンダンを口でいうのをクウム（口音）と言い

ますが、このクウムがうまい人は踊りもうまくなりやすいと思います。それから、踊りを踊るとき、心の中での自分の台本を作って踊るんですが、朝鮮語で台本を作るのと、日本語で台本を作るのとでは表現が違ってくるんです。私は中学生、高校生も教えているんですけれども、最近の子どもたちはそういうのが苦手なんですよね。

踊るときにリズムを口で言うと体がのれるんですよ。私は自然にそれが出てしまう。日本の方を教えるときもそうなっちゃう。「ドーン、クンタッ、タッ」って、身体の動きを口からも出すみたいな。盆踊りの音頭とかと同じ事だと思います。日本の方でもうまい人はうまい。和太鼓の人ともコラボしたことがありますが、人によってですけど口でワーッと出すことで音が違ってくるそうです。そこはすごく大事ですよね。踊るときも教えるときもそれを大事にしています。だから子どもたちにもリズムをいつも言わせています。

――それは栄淑さんが先生から教えてもらったやり方ですか。

宋栄淑：それももちろんあるんだと思いますが、そう教えていただいたからというより、長年朝鮮舞踊を体で研究してきてそうなっているという感じです。一番大事なことが呼吸です。言葉と呼吸もイコールだと思うんですけど、どういうふうに呼吸を落とすかで地に足が着くかが決まる。地に足が着いていないと声もクウムも浮き足立ちます。ここ（胸）の辺でしている呼吸がドーンと下に落ちると、言葉も身体の表現も地に足が着く。そういうふうに今、やっと私もつながった感じがしています。踊りと呼吸と言葉とがつながった感じがあります。

――踊りの台本を朝鮮語にするということについて、もう少し詳しくお聞かせください。

宋栄淑：踊りにもよるんですけれども、特に私の場合、日本で生まれ育って普段は京都弁で生活しています。この朝鮮の踊りをしている人間として味を出すには、やっぱり言葉とか、生活とか。先生も「キムチを食べられない人はその味を出せない」とたとえて言うんですが、衣食住のすべてがそ

の土地に根付いている。当たり前に日本に住んでいたら日本人っぽくなる。私が韓国に行っても「日本人っぽいね」と言われます。見た目というか雰囲気。それは日々の空気だったり、受けている風だったり、環境でそういうふうになっていくのだと思います。ですからその面で、なるべく踊るときは自分の中で朝鮮が出るように、踊るときの台本を書くときは100パーセント朝鮮語で書いています。踊りに物語があるときは特にそうです。たとえば『雪竹花（ソルチュックァ）』という朝鮮版「ジャンヌダルク」。私はその『雪竹花』のハードな踊りをソロで踊る機会がありまして、服装は男ですけど、最後にぱっと帽子を脱いだら髪が長くて女性だということが明かされるというお話です。それを踊ったときに台本を全部1個ずつ自分の中で作っていきます。本番を踊っているときは、その全部を考えているわけではないですが、練習のときは台本に沿って目つきをこうするとか、ひとつひとつ決めていきます。その台本の文章で目つきが変わるんです。思っていることを日本語で台本にすると、目つきが変わります。表情が変わる。ですので、なるべく表現のために、朝鮮舞踊として伝えるために朝鮮語で台本を書きます。指導する時、見ていて分かります。踊り手たち、あ、ここ全然台本できてないなって顔つきで分かります。身体の表現で分かります。そういう場合には、朝鮮舞踊を踊るには自分の中の心の気持ちを朝鮮語で台本にするようにと伝えています。

――舞踊指導以外でも後輩の皆さんや教室の子どもたちの相談にのったりしますか。

宋栄淑：金剛山歌劇団にいるときから後輩たちの相談にはよくのっていましたね。ちょっとカウンセラーに向いているのかな（笑）。心が揺らいだり、不安になったときには、吐き出させて、舞踊のことに限らず、いろんな相談にのっています。

――そういうとき「これだけは伝えよう」と思っていることはありますか。

宋栄淑：その方のその時の状態にもよりますけど見る視点というか、それは自分軸で今本当に思っていることなのか、他人の目が気になって思っている

ことなのかを一緒に確認します。やっぱり劇団にいると背負わなきゃいけないものがあるんですね。在日の金剛山歌劇団というと、どうしても肩の荷が重い部分もある。プロの世界はそうですよね。今、ちょっとダラダラしたいけどダラダラできないとかから始まって。いろいろあると思うけど、「今、ほんまは何をどうしたいのか」、「ほんまの自分はどう思っているのか」と、本当の心の声に耳を傾けられているのか。それとも、あの人のあの言葉が気になっているのか、まずそこですよね。「考えてみ」って。「これやらなあかんし……」っていうのも、もちろんプロだから、あるけれども、それを置いておいて「やりたいこと 100 個書きな」って言います。「とりあえず 100 個書いてみ」って。「今、そんなこと考えられません」って言うけど、「いいから書き」って言って。そうやって向き合っていると、ふわって明るくなりますね。100 個書けなくてもいいから、ほんまはどんな踊りがしたいのか、ほんまはどうなりたいのかというのをもう一回思い出す。それをしてみて、「それでも嫌やったら辞め」って言います。

――栄淑さんご自身は壁にぶつかったとき、どうされているんですか。

宋栄淑：私自身は本屋に行きます。膝を怪我してしまってどん底だったときも、本屋に行って『ユカリューシャ』という本に出会ったんです。『ユカリューシャ』は東京バレエ団の芸術監督をしている女性、斎藤友佳理さんのロシアでの自伝です。その 1 ページ目をパッと開いたら、出だしの章の題名が「どん底」だったんです。「これ、（今の）私やん！」と思ってすぐに買って読みました。その方はロシアでトウシューズを履いて踊っていて、花吹雪で滑って、膝の靱帯移植の手術をされているんです。そういう経験をした人が、怪我を克服して東京バレエ団の芸術監督をなさっている。その本の最後に「渡邊先生ありがとうございます」と、怪我の克服を支えてくれた先生のお名前が載っていたんです。そのときは、今のようにインターネットもなくて、電話帳で調べたりして、どうにか探して訪ねて行ったんです。その先生との出会いで今の私があります。

その先生が朝鮮舞踊を見て感動してくださって、私の体を「一緒に治しま

しょう」ってリハビリもしながら、オステオパシー療法という施術をしながら。まず歩く、歩いて冷却する。歩き方を学んで、次にスクワット。1日千回とかしながら、少しずつ。それからピラティスにいって基礎。体の骨盤や感覚を治して、基礎をやりながら、自分で私はこれだけ歪んでいたんだと分かる。それでもっと体と向き合うようになりました。

でもそれだけでは駄目でした。体が整っても、心が不安になったり落ち着かなくなるとまた違う形で体に歪みがでる。生理が来なくなったり、女性はそういうところに出ます。それで自力整体の免許も取って、東洋医学の気学を学んで。やっぱり両方、心も元気じゃないと駄目だし、体も元気じゃないと駄目。心と体が一致することが大事です。「今ここ」の瞬間に意識を向けて、何があってもなくても有難いなあと身体をなでながら手を胸に当てて深く呼吸をします。メディテーションですね。身体を愛でると思考もやわらいでいきます。

――少しずつ試しながら取り入れていく、ということですね。

宋栄淑：そうですね。私は結構何でも受け入れるタイプだと思います。やってみないと合うものと合わないものが分からないし。人によって相性もあるので決めつけない。ジャッジしないで何でも試してみるタイプです。

――コロナ禍で指導もZoomになったりすると、伝えられる内容も変わりますよね。

宋栄淑：Zoomでは皆さんを立体で見れないですからね。私はエネルギーや、その場の雰囲気を大事にするので、集まっている人たちの体調や顔色を見ながらエクササイズの内容も変えています。あらかじめ「今日これ」とは決めずに、季節がこうで、今日の天気はこうだから骨盤締めようとか、心臓の辺りを開こうとか、肋骨伸ばそうとか、ある程度のテーマは決めますが、皆さんのエネルギーを見ながら調整してやっています。ですから、Zoomのレッスンでは限界はあります。でも「相手と遠いな」と思ったら、遠いんだけど、なるべく近づくために「手を出してください」って（手を差し出しながら）呼びかける。ほら、なんか分かります？遠いけど、すこ

し近づいた感じがしませんか。こうやってコミュニケーションを取りながら。あと画面の縁がここだから、こうやって両腕を伸ばして説明するときに私の手が（画面の外にはみ出て）ちぎれたりとか。うまいこと私がやればいいんですけど、そういうのはまだ足りない。うまく見せられるように勉強しないとなって思っています。でも、今の時代すごいですよね。こうやって iPad ひとつでコミュニケーション。こうしてつながっているだけですごくないですか。可能性がすごいと思います。

――本当にそうですね。元気をもらいました。最後にもうひとつ、高校生のとき、舞踊家の道を選ぶ前にスチュワーデスになりたくて英語をがんばった。その英語はどうなりましたか。

宋栄淑：えええっ（笑）それ聞きますか？英語は本当にもっとちゃんとやっておけばよかったって、いろいろな国の人たちとコラボするときに役に立ったかなって、今になって後悔しています。本当、そうですね。また始めようかなって思っています。

宋明花（ソンミョンファ）さん

1976年、愛媛県に生まれ育つ。在日コリアン三世。父方の祖父母は済州島の出身。小学校から高校まで朝鮮学校で学ぶ。1995年、金剛山歌劇団に入団。民謡のソリストとして21年間活躍し、声楽部長を務める。団員の演奏家と結婚。2016年に退団。現在は宋明花民謡教室主宰、西道民謡を中心にカヤグム（伽耶琴）ピョンチャン（弾き語り）などの公演活動、ボイストレーニング、教授法指導など活動の幅を広げている。一児の母である。

（インタビュー実施日：2021年8月4日）

――家の中にも朝鮮語があるご家庭でしたか。

宋明花：小さい頃はほとんど日本語でした。たとえば「お父さん・アボジ」、「お母さん・オモニ」、「おじいちゃん・ハラボジ」、「おばあちゃん・ハルモニ」、「お兄ちゃん・オッパ」、「お姉ちゃん・オンニ」、あとは「台ふきん」もなぜか朝鮮語で「ヘンジュ」。そういうちょっとした単語はたくさん朝鮮語を使っていましたけれど、ほとんど日本語です。

ただ、祖父母は朝鮮語を使っていたので、意味は分からなくてもよく耳にしていました。はっきりとした記憶ではないですけども、オモニがハラボジとお話するときは朝鮮語だったと思うんですけども、それは生活の一部だったので、「大人が話す言葉」と認識していたかもしれないです。理解できないからって違和感をもつとかはなかったです。

――小学校から朝鮮学校に入って、そこから朝鮮語の世界が始まるわけですね。先生やみんなが話していることが分からないと感じましたか。それともすんなりと入っていかれましたか。

宋明花：四国の朝鮮学校に入学して初めて朝鮮語を習ったんですが、言葉が分からない、どうしようという不安はひとつもなくて、むしろ朝鮮語がすて

きで、私はすぐ魅了されてしまいました。すてきだなと思ったんです。字も面白くて夢中で勉強しました。

――それは誰が話す朝鮮語もいいって感じたのですか。それとも今思うと担任の先生のいろんな雰囲気も含めてすてきだと感じたのか、いかがでしょう。

宋明花：確実に担任の先生です。これはよく母にも言うんですけれど、字もとてもきれいでした。1年生、2年生のときの担任の先生お2人が、とても字もきれいで声もすごく柔らかくて。私はまだ何も分かっていないですから比べることはできなかったと思うんですけれど、とてもすてきだと思いました。

――日本語と朝鮮語を別の２つの言語と捉えるようになるのはまだもう少し先でしょうか。

宋明花：どうでしょう。父と母、アボジ、オモニが話す朝鮮語の記憶があまり、今も話すのを聞くんですけれども、学校で習う前の朝鮮語の記憶があまりないですね。祖父母、ハラボジたちとしゃべっている同胞のオルシン（年長者）が話しているのを別個に、違う回路で聞いていたのかな。よく分からないです。日本の保育園に1歳から通いましたが、3人在日コリアンの子がいて、よく3人で遊んでいました。その子たちもみんな朝鮮の名前で、「パパ、ママ」のことを「アッパ、オンマ」と呼ぶ。自分たちは「アッパ、オンマ」と呼んでいるけど、他の子たちは「パパ、ママ」と呼んでいる。先生方がそれを当たり前のことのように、私たちに対してはみんながいても普通に「オンマ迎えに来たよ」と言う環境でした。違う呼び方だけど同じ言語ぐらいの感覚だったと思います。その頃は朝鮮語と日本語が同じひとつの言語のように頭の中にあったのではないかなと思います。「あなたたち朝鮮人でしょう」とか、いじめも1度も経験したことなく、私のことも普通に「ミョンちゃん」って呼んでくれる。当たり前のように朝鮮人のソンミョンファとしてそこにいることを近所の方々も受け入れている。ですから別の言語と自覚したのは、朝鮮学校に上がってから「これが朝鮮語だったのね」とつながったと思います。「だからうちはヘンジュ

（布巾）だったんだ！」と。

――歌を歌っていく中で、あるいはその指導を受ける面で朝鮮語を再認識するということはありますか。

宋明花：やはり高校で平壌の音楽大学に通信の入学をしたときが一番大きいですね。3年間行きましたが1年目に言葉の壁にぶつかりました。今話している、これぐらいの調子で朝鮮語も話せているぐらいの感覚で行ったんですね。現地の方々が話すように私も話しているという感覚で行きましたので、今思うと図々しいんですが、平壌に着いてすぐ、これはまずいと思いました。何か違う。やっぱり生活用語の量が違いますし、表現が乏しい。あと発音が甘い。そういう弱さにすぐ気付きまして、かえって萎縮して話せなくなってしまいました。ずっと人が話しているのを観察していました。

――歌うときの朝鮮語というより、まず生活面での朝鮮語が課題になったんですね。

宋明花：分からない言葉がとても多かったので。たとえば喉にいいからと先生が多分ごま油を飲ませてくれたんですね。「チャムギルム」って言われたんですけども、チャムギルムが何か分からなくて。飲んでみて、「あ、ごま油なんだ」って分かる。そういう感じです。チャムギルムは、今では日本語のカタカナで「チャムギルム」って書いてある商品もありますけど、その当時は料理もしないから見たこともなかったんです。高校生のときは平壌に40日ぐらい滞在しましたが、最後の方は朝鮮語で物事を考えたりもできるようになっていました。はじめの頃は、先生が話された朝鮮語を聞くのは朝鮮語ですけど、それに対してどうしようかなっていう私の頭の中は日本語だったと思います。

――話しているときの朝鮮語と、歌うときの朝鮮語はつながっていきますか。また別という感じですか。

宋明花：そうですね。今となると、朝鮮語の発音、抑揚がそのまま旋律にのっかったものが民謡になっているという答えが出たんですが、それはつい最近のことです。それまでの長い間、私は別個で考えていました。まず言葉

の壁にぶつかる。それをクリアするために、人が話しているのをじっと見て観察したり、真似してみたり、自分なりに工夫します。それとまた別に平壌で習った発声練習。日本に住んで、日本語で話すことに慣れていると鼻腔に響かせるのが弱いんです。日本語はどちらかというとこの辺（鼻の先）に響きます。良い、悪いではなくて、大陸の方はこっち（眉間）の方にも響く言葉なので、そっちまで響かせるのが苦手でした。それが朝鮮民謡の華やかさが足りない理由になっている。そういうふうにつなげていって自分なりにトレーニングしていくという感じです。

――発声練習から徐々に言葉の発音にもつながっていくということですか。

宋明花：民謡歌手として活動していたので、民謡を中心に考えています。ここでもう一度、朝鮮語が持つ抑揚が足りないということに気付きました。朝鮮語がとても単純に発音されていたんですね。朝鮮語はとても立体的です。その立体がぺちゃんこだと歌もぺちゃんこになってしまう。そこをまずは自分なりに想像してこれかなとやってみたり……。私は生活もインドア派なのですが、外からじゃなくて、ひとつの曲の内側から徹底的に見ていくという感じです。ぱーっと歌って、ひととおり歌えているんですけれど、どこか歌いきれていない。やっているのに何かが足りない、というのを感じる。それに対して、こういうことかな、ああいうことかなと探していく。たとえば、特にパッチム（終声）、ニウン（니은：ㄴ終声）、イウン（이응：ㅇ終声）、ミウン（미음：ㅁ終声）というのが、舌と唇はその位置にいくんですけど、その後の響きが弱くて、パッチムとして聞いている人に認識されないというのも何度も何度も練習しました。最近、やっとそれらがつながってきた感じがしています。

――その発音や言語の表現というものを幅と考えることもできると思うのですが、やはり本場のように、平壌の人が歌うように、朝鮮語のネイティブが歌うように、ということが大事というか、目標ということになりますか。

宋明花：朝鮮半島の北に住んでいる方はざっくり言ってしまうと中国寄りの響き、平壌の方々も中国語に近い響きですね。南の韓国の方々のほうが少し

トーンが低くて少し柔らかい感じ。私の周りは済州島出身のおじいちゃん、おばあちゃんがたくさんいらして、その言葉を聞いていたので、初めて平壌の朝鮮語を聞いたときは「同じ言語かな」って思うぐらい響きと言い回しが違うと感じました。さらに、私たちは朝鮮学校で教科書の文章で習ったものを、そのまま話す言葉にも使いますので、表現が硬い感じになります。プラス、話す時に響かせるのが弱い。先ほど、小学生になった私が担任の先生の言葉の抑揚に魅了されたというお話をしたのですが、先生方はきっと二世だったと思うので、日本語の耳に聞きやすい朝鮮語だったのではないかと思うんですね。日本語寄りになっている。でも、その時も発音の練習をしました。「口を閉じる」と言われて、話すときに口を閉じることがあるんだと面白く思ったり、舌を少し上顎にくっつけるリウル（ㄹ）の音の練習とか。キムチも日本語で言う「キムチ [tʃi]」じゃなくて、強い発音を入れて「キムチ [tʃʰi]」だとか。そういう日本語にない発音を教えていただいて、面白くて一生懸命やっていた記憶があります。ですから、私は在日同胞のおじいちゃん、おばあちゃんたちもネイティブだと思うんです。そのおじいちゃん、おばあちゃんの済州島の言葉の響き、朝鮮学校の朝鮮語の響き、平壌の朝鮮語の響きに触れてきました。どれがいいとか悪いとかではなくて自分で好きなのを選べるのがいいなと思います。知らなくてそう歌うよりは、選択してそう歌えるのがいいと思いますね。その民謡が生まれた地域で使われているような、それに近い感じの立体的な朝鮮語を追求していく。そうすると幅が出来てきます。日本語にも関西弁と関東弁があるように、朝鮮語も地域ごとにそれぞれの特徴をもった言葉があるので、民謡も言葉の抑揚が違うから地域ごとに違う旋律が生まれたわけです。ですので、目標はそれらを自由自在に選択して歌っていけるようになることです。

――そういう言葉のことは指導される時も意識していますか。

宋明花：今、私がやっている民謡教室については、朝鮮語が分かる方々にはニュアンスを伝える上ではなるべく朝鮮語を使っています。たとえば「ボリ

ュームを大きく」ということについてもいろいろな言葉で伝えられますよね。音楽用語とか表現の言葉に関しては極力朝鮮語で伝えたいと思います。同じような意味でも使われている環境が違えば、きっと感じ方も違うだろうと思いますので。歌に関してはもちろん朝鮮語です。何気ない会話のときは朝鮮語だったり日本語だったり、混ぜたりしています。

――コロナ禍で教室はどうされていますか。

宋明花：ボイストレーニングと、あと民謡講習会を Zoom で開いたりしています。先日は朝鮮学校の音楽の先生たち、東北、茨城、群馬、北海道をつないで開きました。そこでお伝えしたのが、私もそうですし在日の方々が陥りやすいところとして、子どもたち、学生たちのパッチムが甘いとはどういうことなのか、響かせるとはどういうことかをどうしたら伝えられるかと考えました。まして民謡となると難しいという固定観念があります。私独自の楽譜があるんですけども、たとえば、朝鮮語が母語でない人が民謡を歌うと、パッチムをやっている時間が劇的に短い。そこを「このぐらいたっぷりとパッチムを言うんだよ」と見て分かるように楽譜に書き込みます。あと、「ト」を強く発音しようとして「トオ」と言ってしまいがちなのですが、そうではなくて、歌の場合は「トー」の量を楽譜上長く言うことを意識させるように楽譜に書き込むと、結果的に強調された「ト」の音がアクセントとして出てくるとか。それも場合によっては、1 で「ト」を歌い始めるのではなくて、1 のほんの少し手前から「ト」を言い始めておく。そうすると強い「ト」が出て聞こえるとか。そういうことを楽譜に書き込んで練習していくと、話しているときもパッチムが短いとか、話し始めが遅いとかいうことも気付いていきます。それで韓国ドラマをよく見てみると、私たちが思う言葉の始まりからしゃべっているんじゃなくて、パッチムからしゃべっているように見えてくる。それぐらいたっぷりパッチムの間を取っていいんだと。そういうこととともつなげながら歌を教えるときに取り入れたりしています。マニアックすぎるかな、と思う面もありますが。あと、Zoom で歌のレッスンはめちゃくちゃ疲れます（笑）。ぼー

っとやってててもオーラも何も伝わらない。画面に近づいてああだこうだと、伝わらないから思わず力が入ってしまって、汗かきながらやっています。

――将来的なことはどのように考えていらっしゃいますか。

宋明花：金剛山歌劇団で後輩がすごく増えて私が声楽部長になったときに、次の世代にこういうことを伝えていきたいということが少しずつ生まれてきました。自分が歌うだけではなくて仲間たち、後輩たちに伝える場面、教える場面が増えたので、そこでよりマニアックになっていったという面もあります。それから結婚して子どもが生まれて、子どももとても歌が好きで毎日熱唱していますが、楽器もやっています。今高２ですが高１から通信教育（短期留学）に行きたいとずっと言っていたのですが、コロナで行けなくなってしまってかわいそうだなと思っています。でも、金剛山歌劇団の奏者の方に、楽器のリードの作り方を習うとか、前向きにやっているようです。

それと、やっぱり今の子どもたちの世代の言葉を聞くと、多分私もそうだったのでしょうけど足りないなって思う部分があって。言葉大丈夫かなあという心配があります。家で日本語が多いからしかたないですよね。その辺は学校で頑張ってもらうしかないのかなと思いながら。それで、私が先日の民謡講習会の準備をしながら、ストンと私の中に降りた事なんですけど、朝鮮語の美しい抑揚が、歌詞の中に余すことなく埋め込まれて、きれいに旋律に当てはめられて生まれたものが民謡だと思ったんです。言い換えれば、民謡を音楽の先生が教えるときに朝鮮語も教えられるんじゃないかなって。そう先生方にお伝えしたんです。歌の最後の「ヌ」の音が甘くなるという具体的な音の話ともつなげながら。だから、この私独自の楽譜を用いていただいて、先生方がしっかりと抑揚や響きを響かせて歌うことによって、それを聞く子どもたち、それを一緒に歌う子どもたちが、それまでより朝鮮語を上手に発音できるようになって、それがたまって朝鮮語もだんだん上手になっていく。そんなふうにできたらいいですね、という話もしたんです。

言葉のことは心配もありますが、私の子ども時代よりいいなと思うこともあります。私は朝鮮語を習ったときに親と朝鮮語で話せなかったんです。多分まだ自分は下手だと思って自信がなかったのかな。今は話しますが、習いたての頃は恥ずかしくて話せませんでした。ところが息子は家でも平気で話します。「ここ下手くそだな」とか言いながら話しています。息子の性格的な面もあるかもしれませんが、その点はいいなと思っています。

河明樹（ハミョンス）さん

1977 年、新潟県長岡市生まれ東京育ち。在日コリアン四世。父方の曾祖父が 1925 年に全羅南道光州から渡日。小学校から高校まで朝鮮学校で学ぶ。朝鮮大学校卒業。ソヘグムの奏者として金剛山歌劇団に 10 年間所属。団員のソヘグム奏者と結婚。2006 年退団。現在は、1965 年創業の焼肉店の三代目オーナーシェフとして経営に取り組みながら、妻と共にソヘグムの演奏活動、指導にあたっている。一児の父である。

（インタビュー実施日：2021 年 7 月 28 日）

――子どもの頃、家に朝鮮語があるご家庭でしたか。

河明樹：私自身も日本生まれ日本育ちですし、祖父が日本で生まれているので、祖父は朝鮮語を話しませんでした。祖母は韓国から渡ってきた一世なので両方の言葉が分かりますが、小さい頃日本に渡ってきているので、家では日本語を使って生活していました。私の父母は、朝鮮学校で言葉を学びました。父は若い頃、広島の朝鮮学校で 3 年ぐらい国語（朝鮮語）の先生をやっていたそうです。私も小学校から大学まで朝鮮学校で言葉と文化を学び、民族楽器のソヘグムと出会い、今も演奏者として活動しています。ですので、日本語の方が自然というか、ハングルは朝鮮学校からです。小学校 1 年生で入った瞬間から校内は日本語禁止でした。無理やりにでも朝鮮語を使うという雰囲気があり、学校の中に入ったら、ある意味日本ではないような雰囲気が漂う場所です。そういうところで学びましたので、だいたい 1 年ぐらい経つと子どもたちは朝鮮語が話せる、というか会話が成立するようになっている。小学校に入る前までは「アボジ（父）」とか「オモニ（母）」とか片言の挨拶程度しか分からなかったですね。

――お父さんのことは「アボジ」、お母さんのことは「オモニ」と呼んでいた

んですか。

河明樹：「アッパ、オンマ」であったり。あと家庭では韓国のトロットという日本の演歌みたいなジャンルを父が好んで聞いていました。私も自然に流れているのを聞いていました。それから、同胞たちが集まるイベントに行くと歌を歌っていたり、一世の人たちもいっぱいいる中で自然と言葉に接したり。キムチはキムチですけれど。家が焼肉屋を長年やっていますので、食べ物や料理の名前とかは自然に覚えていました。

幼稚園は日本の幼稚園に通ったのですが、私の周りには在日コリアンがいなかったので、入ってすぐ私だけ名前が違うという、ひとつの壁ですね。なんか違うというのを周りの子たちも気付きながら。ハミョンスの「ミョン」という発音が日本語でもあんまり、今では外来語がいっぱい入ってきて使うと思いますが、今から40年ぐらい前だと「ミョン」という音があまりなかったのかな。会話にも出てこない。それで私の同級生たちが家に帰って「ハミョンスくんが……」みたいな話が出るんでしょうね。そうしたら今まで聞いたことがないような発音を子どもがしているということで、幼稚園でちょっと言葉がおかしくなったみたいな、苦情みたいなものがあったみたいです。子どもたちは「ミョン」と言えているんですけど、大人の方が「ヨ」を強調しちゃう。「ミヨンスくん」とか、そう大人が呼ぶ中で、子どもたちは耳がいいからちゃんと発音しているということが話題になったのを、今ちょうど思い出しました。

――在日同胞の集まりも頻繁にあるけれど、日本社会にも馴染んでいらした。

河明樹：そうですね。親戚もとても多かったので。母の実家は新潟ですが、神戸の方にも親戚がいました。それこそ朝鮮半島は北にも南にも親戚がたくさんいました。今は韓国としか往来ができないのですが、昔は北の朝鮮の方とも往来があった時代は親戚との交流も盛んでした。

私の叔父は朝鮮大学で体育の教師をやっていたんです。そのせいもあって民族的なものに熱い人で。その幼稚園の卒園のときにみんなで歌を歌うんですけど、それは日本の歌なわけです。「あなたは朝鮮人だから朝鮮の歌

を歌いなさい」と朝鮮語の歌を教えてくれたという思い出があります。幼いながらに「いや、さすがに歌えないよな」と思いながら習ったのを覚えています。

――朝鮮学校に入学したときはすんなりと馴染みましたか。

河明樹：今はもうなくなってしまいましたが、当時は世田谷に朝鮮学校がありました。私の父も通った学校です。入学式の日に１年生が挨拶をするんですね。それは朝鮮語でしないといけない。それで入学前に先生が家を訪ねてきて、意味は分からないんですけど朝鮮語を教えてくれました。挨拶の言葉です。具体的に何を言ったか、記憶にないのですが、その時、朝鮮語で挨拶をしたということが初めて正式に使う朝鮮語でした。

――次の日から授業もすべて朝鮮語になるわけですか。

河明樹：そうです。すべて朝鮮語で学びます。ただ、今になって振り返ってみて思うのは、朝鮮学校の先生たちは朝鮮語のネイティブではないですね。英会話ならネイティブの教師から習うということが普通にありますけれど、朝鮮学校では今、私が四世なので私の子どもは五世になりますが、代を継いで学校を守っています。ですので、今、子ども達は二世、三世の人たちから習っているわけですが、やはり日本の文化、日本語のイントネーションと触れることが多いので、会話のイントネーションが日本語になっています。ハングルなのに日本語のような。ですので、私自身、韓国や朝鮮に行って一番最初ぶつかった壁が「なんか違うな」と。相手の言葉を聞いても「習ってきたものとなんか違う」と気付く。一番違うのがイントネーションですね。

――たとえばどんな例が思い浮かびますか。

河明樹：「アニョハセヨ」から違います。学校ではその時は「アンニョンハシムニカ」って、敬語というか、教科書そのまま、会話では出てこないような表現を習っていたので。平壌の先生方は日本から毎年受け入れているので、私たちがどういう朝鮮語を話すか、ある程度分かっていてそれに合わせてくれたりします。それが、韓国に行くようになったら「なんか学者み

たいな言葉使うね」とよく言われました。どんどん言葉って変わっていきますし短くなっていったりします。朝鮮学校で習う言葉には昔の言葉がそのまま残っていて、でもイントネーションは「アンニョンハシムニカ」と日本語に限りなく近い。

――カタカナで書き表したような感じですかね。

河明樹：そうですね。カタカナ、そういう影響もありますよね。日本語は50音で子音と母音で分けるとしたら母音が5個ですが、ハングルは母音だけで21あります。同じ「オ」でも普通に「オ（ㅗ）」とするのと、もっと口を開いて「ゥオ（ㅜ）」とやったり、口を横に広げて出す「オ（ㅓ）」と。向こうも言葉がどんどん変わっていくんですが、ここでは日本語読みになっているので、みんな日本語っぽい「オ」になって、そうすると意味も変わってしまったりします。それで通じなかったこともありました。

日本でも寒い地域に行ったら言葉が早くて、南の方に行くと言葉が穏やか、ゆっくりになると聞きますが、朝鮮の場合は北の方に行くと中国との国境沿いは中国の影響も入ってきているので、中国語っぽいハングルを使う人もいます。イントネーションが中国語風に聞こえます。実際、中国語を話せる人も多くいて、中国語を聞いてるような感覚になる感じの人もいました。逆に南の方に行くと、在日の中で成立している、ひとつの在日語みたいな方言が分かるみたいです。韓国に行って私が話すと「日本から来たな」ってすぐ分かるようなんです。いかにそれを分からないように話すかというのはひとつの課題です。

――分からないほうがいいということですか。

河明樹：「通じるよ」って笑いながら言われることがありました。それを笑われながら言われるのも嫌だよね、と仲間とよく話します。日本語の方がトーンが高いそうです。「ちょっとトーンを低めに話したらそれなりに聞こえるんじゃない」と言われたことがあって、低めに話してみたらバレなかったりすることもありました。あと発音をしっかりする。21個も母音があるので、できるだけ口の動かし方を忠実に、はっきりさせたり。それを

しっかりすればするほど通じやすくなってくるなっていうものは経験的に感じています。

――平壌でも同じですか。

河明樹：私が初めて朝鮮語のネイティブの人たちと出会って話したのが、小学校6年生の時に年越しコンサートに参加した時なのですが、その時は向こうに暮らしている親戚にも会うことができました。なかなか通じにくいと感じたのか、理由は分かりませんが、日本から渡っていった親戚は日本語で話しかけてくれました。私の朝鮮語ではうまく伝わりにくかったのかなと思います。北の方はなんせ話すのが早いです。早口言葉を聞いているみたいに感じました。向こうの言葉で「ゆっくり」を「チョンチョニ」って言うんですけど、あんまり早い人には「チョンチョニ」って言うと笑いながらゆっくり話してくれたり。私たちの在日語が面白いみたいで、流行語みたいな感じで私たちが使う言葉を真似て取り入れているのを聞いたりしました。

――どのような在日語が流行っていましたか。

河明樹：日本語って語尾に「やりますよねー」とか「ね」を付けるじゃないですか。私たちも朝鮮語の語尾の「イムニダ」を「何々をやりましたイムニダ」ってつけて遊んだりしますけど。日本語をずっと話していて最後だけ「イムニダ」を付けたらなんか朝鮮語になったような感覚に陥るというか。それと同じようにハングルをずっと使っていても最後に「ね」を付けてしまう。それを聞いている向こうの人たちが、その「ね」がかわいいね、みたいな感じになって、向こうの人たちも最後に無駄に「ね」を付けるようになったりして。そういうふうに言葉で遊ぶようになるのは大人になってからですけど。

――言葉の課題は生活面が主ですか。

河明樹：演奏にも関係します。やはりその国の言葉の発音っていうのは楽器でも表現しないといけません。ですので、音の出し方とかも、たとえば日本語で言う「カ」はひとつですが朝鮮語だと3種類あります。ちょっと

高音が鳴る「カァ」（濃音까）っていうのと、アクセントを入れる激音の「カッ」（激音카）、日本語に近い普通のが「カ」（平音가）と３種類あります。その発音を演奏でも表現するためには、その朝鮮語を知っていないと出せない。

――味も言葉も音楽もつながっているというお話がありましたが、ネイティブとノンネイティブでどちらが本物、あるいはどちらが良いかということについて、どうお考えですか。

河明樹：それぞれ良さはあると思うんですよね。すべて人が作り上げてきたもので時代とともに変化もしていくものですので、新しい味も新しい音も新しい言葉もどんどん出来上がってくると思います。それぞれが個性だと思いますが、やはりネイティブの良さがあると思います。それを知らずに独学でやって良いものがうまれることもありますけど、私はネイティブの良さに触れる機会があったので、そちらも追求していきたいと思っています。実は、今の私にとって、その辺りがとても重要な課題になっています。旋律を作っていく上で、今、五線譜を私も使っているのですが、楽譜を見れば音はすぐに出せます。朝鮮の歌の旋律というのは民謡なわけですよね。音楽というものは楽譜がない時代からあるもので、それが口伝で、人の口で発されたものが耳に聞こえて、どんどんどんどん受け継がれてきたものを、現代では譜面に起こしている。それが出来ることで誰でも一緒に共有できるという利点はあるんですけど。でも、どうしても五線譜に表せないような響かせ方。今話題になった言葉の発音が音になっている部分。そういうものは音符には表せない。まず譜面上の旋律から私たちが入っていたものが、実際に向こうの土地の人たちが歌うものを聞きながら、ここはもうちょっと鋭く演奏するのかなとか、もっと柔らかく演奏するのかな、と。弦楽器はそれが生まれたところの言葉に近い演奏ができる。弓で弾く楽器の面白さでもあり、難しさ、奥深さでもあると思います。その複雑な音色を表現できる楽器を演奏する者として、私がそれを知っていて演奏するのと、五線譜だけを見て演奏するのでは、まったく表現に違いが出ます。朝

鮮の民族だから出せる音というのが、同じ曲を弾いても変わってくるのではないかと思っています。そういう言葉のニュアンスとか発音と音色との関係については、民謡を専門とする同僚、若い頃から平壌留学も一緒に行って切磋琢磨した仲間が、一生懸命勉強して研究していますので、そういう仲間から私が教えてもらって取り入れている部分がたくさんあります。

――コロナ禍で指導を Zoom でなさったりするとのことですが、言葉に関してはどのような工夫をされていますか。

河明樹：朝鮮学校の子たちに教えるときは、隣に先生もいらっしゃったりするので、できるだけ朝鮮語を使おうとするのですが、その子たちも日本で生まれて日本で育っているので、日本語の方が伝えやすかったりするのは事実ですね。ただ実際に演奏しながら、先ほど言った発音の面、音の出し方であったり音の切り方が、日本語とハングルでは語尾の表現が違うのと同じように、だいぶ違うと思いますので、そういう奏法を伝えるときには朝鮮語が出てきたり。あと、味を出すことのヒントとして民謡を歌ってあげたりします。Zoom で音色や微妙なニュアンスがどれぐらい伝わっているのか、その点は限界がありますが。ただ、技術的なことや事務的なことを伝えるときは、日本語の方が伝わりやすいので内容に応じて言葉を選んでいますね。

今のこのインタビューが、こうして日本語で話してつながれているように、つながるには本当に言語って大切だと思います。言葉で伝えられるのと伝えられないのでは大違いです。ですから、音色で分かり合えるところも大切に追求していきますが、音色で伝えられなくてもこうやってつながれるという言語の素晴らしさがあります。その両面をこれからも大切にしていきたいと思っています。

【謝辞】インタビューにご参加くださった宋栄淑さん、宋明花さん、河明樹さんに心から感謝申し上げます。言語圏の行き来、次世代への言語継承について、10 年後、20 年後にまたお話を聞かせていただけますことを祈念しています。